

聖母子像

主任司祭 フランシスコ 山口 一彦

2019年11月にフランシスコ教皇様が来日され、その直後から新型コロナの世界的なパンデミックが始まってしまいました。教会では主日も平日も公開ミサが立てられなくなり、私たち司祭は毎日独りでミサを捧げるようになりました。私も、当時担当していた松が峰教会の小聖堂で、孤独なミサを繰り返していました。独りですから、説教はしません。代わりに、福音朗読の直後は会衆席の一番前に座って5分くらい黙想をします。その時、目の前の壁に掲示されていたのが、右の聖母子像です。毎日のことですから、お二人の姿は私にとって、どんどん馴染み深い存在となっていました。



伝説では15歳でイエス様を産んだと言われるマリア様。その初々しさや戸惑い、明るさや優しさ、そういったものが、若々しい眼差しから輝き出ているようです。そして何より微笑ましいのは、幼いイエス様と聖母マリア様が、お互いの頬を寄せ合っているところですね。このお二人の姿をしばらく眺めていると、刺々しく荒（すさ）んだ私の心も、癒されていくように思えました。

イエス様とマリア様に限らず、多かれ少なかれ、私たちはこうして幼少の頃から、親子のスキンシップの中で信頼の絆を育んできました。ところが、自分の気持ちを説明することができない幼児がこの瞬間、本当のところは何を感じているのか、ということが科学的客観的に分析されることは、今まで殆どありませんでした。そんな中で数年前、東邦大学医学部の船戸弘正教授たちのグループが、親子のハグについて興味深い研究結果を発表しました。以下、簡単にその概要をご紹介します。

0歳児とその両親100組以上を募って、大学の実験室に来てもらいます。まず、お母さんが赤ちゃんを20秒間抱っこします。すると多くの赤ちゃんの場合、その心拍数が明らかに下がります。赤ちゃんの副交感神経が活発に働いて安心感を高め、リラックスした状態になったと考えられます。さらにこの実験を繰り返すと、もう少し詳しい分析結果が出ました。実は、生後4ヶ月未満の赤ちゃんには、この心拍数の変化がほとんど見られなかったんですね。

さらに育児経験のある初対面の女性が抱っこした場合にも、赤ちゃんの心拍数は変化しませんでした。その一方で、週に2〜3回程度しか育児に関わっていないお父さんの場合には、お母さんの時と同様に、赤ちゃんの心拍数はリラックス状態を示します。このことは、親の性別による差ではなく、乳児の発達段階と親子の関係性の成熟が、密接に関連していることを示唆しています。さらに興味深いことは、赤ちゃんを抱っこした時、お母さんやお父さんのほうも、その心拍数が下がって、リラックス状態を示していた点です。これは、実際に子育てを経験された方なら、実感として納得できることかもしれません。

マリア様は、年老いた両親、父ヨアキムと母アンナの間に生まれました。二人は娘の誕生を、どんなに喜んだことでしょう。でもマリア様は、幼くして……ある伝説ではわずか3歳の時に……エルサレム神殿で奉仕する乙女として預けられました。ですから、親子の肉体的なスキンシップの期間は、現代の私たちよりも、はるかに短いものだったようです。でもその数年間に、マリア様もきっと、繰り返し両親によって抱っこされたことでしょう。そのたびに、言うに言われぬ安心感に包まれたことでしょう。両親の温かい腕の中で、人間として最も大切な「何か」を受け止め、それを土台として素敵な少女に育っていくことになります。

15歳で神の子を抱きしめるマリア様。今度は我が子から、安心感をもらっています。神そのものである方から伝わってくる最も大切な「何か」を受け止めています。それが聖母子像の姿です。そして、繰り返し皆さんに申し上げている通り、聖母マリア様のお姿は、イエス様を信じる私たちの象徴です。私たちのあるべき姿です。私たちもそれぞれ、母親と父親から抱きしめられ、人間として成長する上で欠かすことの出来ない「何か」を受け止めました。そして今、今度は肉体的にではなく霊的に、イエス様を心の中に抱いて、神ご自身の霊から波動のように伝わってくる「何か」を受け止め続けています。その安心感から力もらって、厳しい現実を生きているのです。

この「何か」とは、何でしょうか。神秘的すぎて、とても人間の不完全な言葉で言い表すことなど出来ませんが、昔、どこかの誰かが名付けた言葉、それが「愛」なんだと思います。皆さん、心の中で、イエス様をハグしていますか。